

暗闇の人

青空カナタ

始まりの日

「ある夏の出来事だった、僕は今でも覚えているあの悪夢のような日を突然暗闇の中から！！」
ガラガラいきなり扉が開いて「こらっ！」悪戯好きな森本が叫んだ

「きゃー」

驚いた女子生徒の何名かが飛び上がった

森本は満足げに「いやー怖い話はやっぱり怖いねー」とおちゃらけながら教室に入ってきて、軽く笑いをとっていた。

僕の名前は岡田雄介、中学2年で、成績は上の中で、好きなことはアニメを見ることだ。

今日は学校の授業が急遽自習になったためクラスの皆で幽霊話や怪談話で盛り上がっていた。

外は大雨で、どす黒い雲に覆われていて教室の電気を消すと、暗く皆の顔もはっきりとは見えない状況で、怪談話にはもってこいの天気だったのだ。

皆で順番に怖い話を披露していた、当面は理科の授業が自習になると前もって言われていたので、皆で何か楽しいことをしようということになっていて、始まったのが幽霊話や怪談話だ。

「今度は雄介の番だぜ」森本が顔をうれしそうにして言ってきた。

「あまりこんな話したことないからできるかなあ」僕はできれば人前で話をしたくない内気な性格だった。

「またまたあ雄介はいつも暗いから逆に怖い話がうまいと思うよ、俺お前の怖い話とっても聞きたいなあ」森本またまたうれしそうな顔をして言ってきた。僕には嫌味にしか聞こえないけど。僕はしぶしぶ話をすることにした。話をするにしても、作り話は得意ではないので幼稚園の頃おばあちゃんと一緒に遊んでいたころに怖いことがあったので、それを話すことにした。

「今から7年前の出来事だ。ちょうど僕らが幼稚園の頃の話だよ」やはり話がうまくできないので、とりあえず淡々と思い出しながら話していくことにした。

あの時も今日のように天気が崩れていて、土砂降りの雨だった。おばあちゃんと一緒に帰る途中で大雨から逃げるように家路の途中の寺で、雨宿りしていた。

雨はやむ気配を見せないの、おばあちゃんはウトウトと眠りの中に入っていった。僕は徐々に何か遊べるものがないかと周りを探していたらどこからか

「カリカリカリ」

何かをひっかくような音が聞こえてきた。僕はその音が鳴るほうへゆっくりと歩み寄ってみた。寺の角を曲がろうとしたその時おばあちゃんが僕の手を取って、こういった。

「向こうにいったらいけないよ」

僕は何があるのかわからなかったが、寺の角の先に目をもっていくと柱と柱の間から指が見えた。

その指は僕が見ていることに気が付いてそのまま引っ込めてしまった。

「おばあちゃん向こうに誰がいるよ」

おばあちゃんをあわてて「知らない人だから見てはいけないんだよ」と少しあわてているかのようにも見えた

僕はおばあちゃんの言うとおりに元いた場所に戻り、雨がやむのを待っていた。

すると

「カリカリカリ」

先ほどよりも音が近づいているではないか、僕はゆっくりと先ほどの寺の角を見

先ほどの指が今度は寺の角の壁をひっかいているではないか

誰なんだろう？僕は気になり、じっと見ていると、寺の角から男の人が顔を半分出した

突然「見ちゃいけない」おばあちゃんが怒った顔で僕の視線を遮った

僕はいきなり怒られたことに驚いて泣いてしまったが、おばあちゃんは知らない人は見たらいけないんだよってさっきも言ったでしょとブツブツと怒っていた。僕にはなぜ見てはいけないのか全く理解できなかった。

おばあちゃんが人差し指をペロツとなめて「ウートートー何も見えない、大丈夫何も見てない大丈夫」そういいながら僕のおでこに丸のような文字を書いていた。

雨があがった後、僕とおばあちゃんは家に急いで帰った。

家に着く前におばあちゃんがこう言った

「雄ちゃん今日見たことはもう忘れるんだよ、じゃないとまたおばあちゃんはまた心配になるんだからね」

とおばあちゃんは僕のほうを見ながら言った。

翌朝、おばあちゃんはそのま目が覚めないまま帰らぬ人となった。

あの時、寺で見たものが原因かはわからないが、ただ、おばあちゃんの死因は溺死だったのだ。部屋は全く濡れていないし、おばあちゃんの衣服も濡れていない状態だったため、医者も原因がよくわからないといていた。

僕は昨日見た何かが悪い者だったのかと、思いながもおばあちゃんが言った事を思い出しながら忘れようと思い胸に刻みました。

僕は淡々と話を続けてきて最後はどう怖がらせていいのかと思いながら周りを見渡した、すると入口の隙間から指のようなものが見えているように見えた、きっと森本がまた悪戯しているんだろうと思った瞬間

いきなり

「バン」

皆は驚いた。しかし僕はもっと驚いた、森本は机の上を強く叩いてまた悪戯をした

森本は満面の笑みで、「なんだ岡本やっぱ怖い話得意なんじゃないかよ、でも今度からはもっと話し方に強弱をつけたりしてもっと怖がらせてくれよ、あと最後のびっくりさせる材料も準備しとけよな」森本は自分はまるで先生のような口調で、僕に命令してきた。ちょっとむかついたので、森本が後ろを向いた瞬間に冷たいカンペンを首にあてた

「わっ」

森本は飛び跳ねて半ベソをかいていた。

「ごめん」僕は森本がこんなに怖がるとは思っていなかったなので、とりあえず謝った。

謝りながら

あれっさっきの指はのようなものは誰のものだったんだろう。とふと思った。

同時に授業終了の鐘がなった。

先生が入ってきて、

「お前ら何しているんだ、ちゃんと自習していたのか」

決まり文句を言ってきた。

みんなは机を元に戻しホームルームの準備をした。

僕はさっきの指は先生の指だったのかと思いそのまま帰る準備をすることにした

でも久しぶりにあのときの事を思い出したな、あの時はおばあちゃん元気だったのに急になくなるなんてなんだか今思い出すと怖いなあ、でもしょうがないよな90歳までは頑張っって元気に生きていたんだから長生きしたよな

*

「さっ帰ろうぜー雄介」

「あっうん、いま行く」

相変わらず森本は変える準備が早いよなあ、かばんの中に入れて帰るもの無いのかなと思いつながら森本のところへ走っていった。

「今日は楽しかったなあ、全部の時間が幽霊話の時間になればいいのに」

「そんなに時間があつたら幽霊話のネタがみんな無くなって逆につまんないよ」

「それもそうだなあ、雄介明日も頼むぜえ、何か考えておいてくれよな」

「いや別に今日話したのは作り話じゃないし」

「ええマジで、じゃあ今からその寺行ってみようぜ、お前のうちに変える途中にあるところだろ」

「でもあの寺、あの時以来行ったことないんだよなあ」

僕は断りたかったが、森本はすでに僕の話なんか聞いていなかった

「そろそろだなあ」

「うん、昔はここが主要道路だったのに今は裏道になって一段、人が通らなくなったんだよ」

後もう少しでつくというところで雨が本格的に降ってきた

「うわあ急げええ」

「ちょっとおいてかないでよ」

猛ダッシュで寺の屋根があるところまで走った

森本はすでに寺の周りをジロジロと見ている

「雄介どの辺で見たんだよ」

「あの時はその先にある角を曲がったところにある柱の間で見たんだよ」

「へえ」

そう相槌をうつと森本はゆっくりと角まで行き、その先を覗いていた

「柱はあるけど何も見えないなあ」

「多分僕のみ間違いだったんだよ」

僕も森本の近くまで行きそのまま覗こうとしたとき

「わぁ」

僕は驚いてしりもちをついた

「どうしたんだよ、いきなり。驚かせようとしても別に今は怖くないぜ」

僕にしか見えていないのか、岡本が手をつけている壁の角に・・・・・・指が三本

「森本そこから離れて、君のすぐそばに・・・・誰か・・いる」

僕はあまりの恐怖で、言葉をちゃんと出せているかわからなかった

「だから別に怖くないからそんな脅かして芝居してもだめだぜえ」

僕は首を横に振りながらもう一度森本に言った

「君のすぐそばに誰かがいるんだ」

森本はもう一度左右を見渡した

「マジで何かがいるのか」

僕はうなずいた

その瞬間雷がものすごい音を立てた

僕と森本はびっくりしてその場にうずくまった

僕が恐る恐る森本の所を見ると指もそれらしい人影もなかった

「雷怖かったなあ」

森本はその前のことを忘れていたかのように雷の話をしてきた

「そろそろ帰ろうか」

僕は早くこの場を離れたくてそういった

「そうだね、雷にうたれると死んじゃうもんなあ雄介またなあ」

森本は足早に去って行った

僕も帰ろう、家まではもうすぐだ

大雨の中ずぶぬれになりながら大急ぎで帰って行った

家に着くとお母さんは心配そうにしていた

「あんた何していたのこんな時間になるまで外を出歩いて」

お母さんはいきなり僕の顔を見るなり怒鳴りつけてきた

「学校帰りに森本と近くの寺に寄り道しただけだよ」

そういいながら時計を見ると、学校が終わってからすでに3時間が過ぎていた

僕はあそこにいたのは長くて30分ぐらいだと思っていたので少しおかしいと思いながらもお母さんの説教を聞いていた。

*

その日の外はずっと土砂降り状態だった

「お母さんが明日も雨かな」

洗濯物をたたみながら言った

「ご飯食べ終わったら宿題して早く寝るんだよ」

お母さんはまだ少し不機嫌そうに洗濯物をかたづけながら言った

僕はご飯を食べながら今日の寺での出来事を思い出していた

今日は寺に行った後、変なものを見てそれから雷の音がして帰ってきたから3時間も経つはずがないのにといいながら明日森本に聞いてみようと思った
僕は宿題を済ませて今日は早く寝ようと思いい床に就いた。
真っ暗な中で外の大暴の音がよく聞こえる、こんな日は気味が悪い。僕は布団を頭からかぶり早く眠れるようにした